スイス建国神話を掘り崩す、苦痛から生まれる言語

――ヘルマン・ブルガー『人為の母』におけるレトリックの諸相――

新本史斉

序

ドイツ文学研究者ペーター・フォン・マットはスイス論『ゴットハルト郵便馬車の前の仔牛――スイスの文学と政治によせて』で、二〇世紀後半以後のスイスにおいて、「起源と進歩を目に見える形で調和させることは密かなる願望夢であった」と述べ、その願望夢を象徴する力において「もろもろの都市は山岳にとうてい及ばなかった」としている。[1] 興味深いのはその力をもっとも有している山が、内側からスイスに向けられたまなざしにおいては、マッターホルン（四四七八m）でもユングフラウ（四一五八m）でもなく、山と呼ぶことすらためらわれるゴットハルト峠（二一〇八m）であることだ。そこにはこの峠が建国神話の舞台となった原初三州に近接していること、南北ヨーロッパを結ぶ交通の要衝に位置すること、ゆえに国家としてのスイスの「歴史」が書きこまれてきたことが深く関係しているだろう。この文化的書きこみの点で、上述の高峰はスイスの「私たち」を束ねる力を欠いているのである。

二〇一六年に世界最長の五七kmを誇るゴットハルト・ベーストンネルが完成し、ハンブルク＝ミラノ間の所要時間が一時間短縮されたことで、ゴットハルトをめぐるこの起源と進歩の調和はいよいよ高度に現実化されたか

に思われる。しかしながら二〇世紀後半以降のスイスにおいては、これとは異なる形でゴットハルトを描き出す数々の言説も誕生している[2]。そして科学技術力の進歩がかくも直線的にナショナル・イデオロギーの強化に順接するのとは異なり、文学的想像力は効率とは無縁の逸脱を繰り返しつつ、集団的心性を拘束している美的、政治的イデオロギーに斜めから介入してきた。以下では、ベーストンネルとは対照的にゆっくりと、また意想外の曲折を交えつつ、スイスとアルプスをめぐる神話的言説の解体を試みるヘルマン・ブルガー（一九四二―一九八九）の長編小説『人為の母（Die Künstliche Mutter）』における文学的掘削作業を読み解いていく[3]。

一　母と母国の虚構性をあらわにする
二重の自己虚構

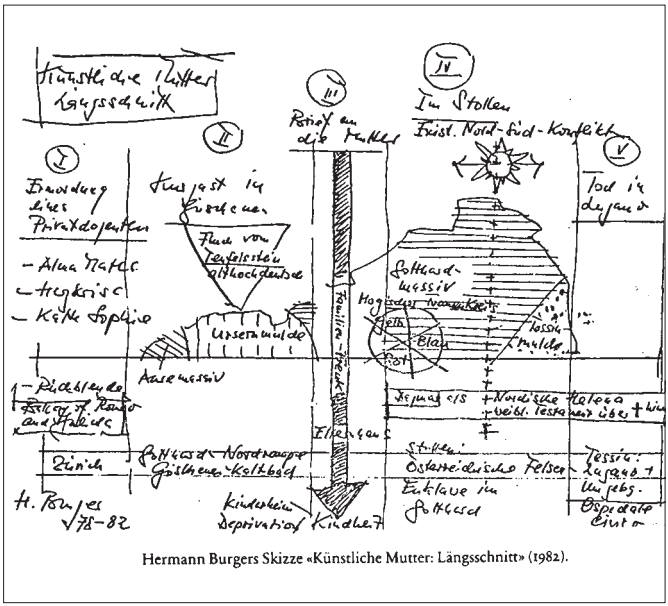
一九八二年に刊行された『人為の母』は以下の五つの章から構成されている。一「ある私講師の抹殺（Ermordung eines Privatdozenten）」、二「ゲシェネンの湯治客（Kurgast im Göschenen）」、三「母への手紙（Brief an die Mutter）」、四「坑内で（Im Stollen）」、五「ルガーノに死す（Tod in Lugano）」。小説全体の梗概をごく大まかに叙するなら、「チューリヒ工科総合大学」の私講師の職を奪われた主人公ヴォルフラム・シェルコプフが、自らの抱えた定義しがたい疾病を治療すべく、ゴットハルト山塊北麓のゲシェネンの町を訪れ、坑内病院で未知の治療法「人為の母」を体験し、アルプス南方のイタリア語圏の都市ルガーノに向かう、となるだろう。

これにブルガー自身がフランクフルト大学での詩学講義「書いていくうちにだんだんアイデアがまとまっていくこと」（クライストのエッセイ「話していくうちにだんだん考えがまとまっていくこと」を踏んだタイトルである）で提示した構成メモを併せ見ると、この作品の全体構造がイメージしやすくなるだろう（図1）。

図の中ほどを水平に走る軸は、上方のローマ数字と章題が示すように、小説の展開軸であると同時にアルプスを挟んでの南北軸ともなっており、古よりイタリアを目指した数多の旅行者たちが辿ったラインと重なっている。ゴットハルトをナショナル・イデオロギーの中心におく言説の形成にも寄与してきた移動のラインである。

一方、中央においてこの水平軸と交差しつつ、深みに

向かって垂直に下降している太い矢印は、第三章「母への手紙（Brief an die Mutter）」が向かおうとする方向を示している。母へ宛てた二十数ページの手紙のみから成るこの章は、後述するように、時間的遠方たる「幼年時代（Kindheit）」へ向かいつつ、作品執筆のもっとも深い動機をレトリカルに吐露するテクストとなっている。



Hermann Burgers Skizze «Künstliche Mutter: Längsschnitt» (1982).

図1（8/130）

かくのごとく、長編小説『人為の母』は、母国スイスのナショナル・イデオロギーを形成してきた諸々のモチーフとの対峙、主人公シェルコプフの――そしてそこに重ねうるブルガー自身の――〈母をめぐる病〉との対峙という二本の糸から編まれた、二重の意味での自己虚構的なテクストであり、作品タイトルと同名の未知の治療法に主人公を赴かせるブルガーは、この長編小説執筆を通じて発見的に、国家レベルでの母（＝神話化された女神ヘルベチア）と個人レベルでの母、両者の解体を試みようとするのである。

二　人文軍事科学学部ｖｓ私講師（ドイツ文学および氷河学専攻）、あるいは、「精神的国土防衛」的制度に対する文学的・文化学的批評

二〇世紀後半のスイス文学の保守性を、作家としても研究者としても厳しく批判してきたブルガーは、小説

『人為の母』を、チューリヒにおける大学業界の虚実織り交ぜた叙述から始めている。

いや、雹で台無しになったこの五月第二週の母の日が過ぎても、すなわち晩霜の聖人たるパンクラティウス、セルヴァティウス、ボニファティウス、そしてソフィアが氷河シンポジウムを行ったとでもいえよう寒日が過ぎても、私はなお、予定通りゲシェネンに入ることができないでいた。スイス応用技術の母なるスイス工科総合大学人文軍事科学学部のスキャンダラスな学期中会議のあと、まずはETUの恥辱が一掃されねばという話になり、そこで近現代ドイツ文学および氷河学――この人文系分野と自然科学系分野との結合は随意科目学部の古くからの伝統によるものである――を教える私講師ヴォルフラム・シェルコプフは、学部長ヴェルナーによる講師契約の扼殺に対応しなければならなかったのである。(5/7)

ここで現実にチューリヒに存在する「スイス工科大学」(ETH)が「スイス工科総合大学」(ETU)へ書き換えられ、併せて伝統的な「人文学部」が「人文軍事科学学部」という奇妙な複合学部に書き換えられていることは、単なる書割にとどまらぬ、この作品の核心に関わる設定と言わねばならないだろう。この冒頭の虚構でブルガーが批評の射程に入れているのは、まさにフォン・マットがいうところの「起源と技術」の調和による「願望夢」を実現すべく、近現代スイスにおいて組織化されてきた知的制度全体なのであり、わけても一九三〇年代以降、第二次世界大戦後も断絶することなく続いてきた文学的・人文学的言説と国家主義的・軍事的言説の特殊な絡み合いの歴史である。

第八学科の軍事学専攻は、スイス軍のレデュイ防衛構想の地形的構成要素としての氷河が、この国の直近の文学によって横領され、そのことによって地質学的かつ戦略的状況がいわば外国へ、すなわち敵側へ漏れたことを目にし不快感を覚えていた。以下の文章は軍事史研究者シェーデリンによるものである――「氷河は我らが山岳歩兵隊なのであり、もしもロシアがスイスほどの氷を擁していたなら、ヒトラーも侵攻をためらったことだろう。」

ヴォルフラム・シェルコプフは、その就任講義において、一九六〇年代ジュラ山岳南麓にぬくぬくと居を構えていた現代スイス文学において、アルプスの凍りついた積氷前線を下から溶かそうとする傾向がみられることを示唆したのだが、これはむろん、軍事研究者らが話題とするところとなった。「この破壊文士たちは」と言われたことだろうが、社会組織のみならず聖なるものにも手をつけようとしている、すなわち、我らが神が――周知のようにそれにちなんで中央アルプス山脈の中心たるゴットハルトは名づけられたわけであるが――みずから天と地を創造されるに際し、来るべき盟約者団のために特別に、極秘に、内密にとりわけておいた自然防衛力に彼らは手をつけようとしていると。これこそが急襲作戦さながらに行われたヴォルフラム・シェルコプフの講師契約剥奪の理由であった。(5/9f.)

実際のところ、ゴットハルト峠におけるレデュイ要塞と、チューリヒ市のかつての要塞跡地武器庫の上にある、幾重にも防御を固めた「ゼンパー＝グル」大学行き止まり駅の間にはきわめて興味深い並行関係があった。[……] 聖ゴーデハルデはいわば――とりわけ地理学、水文学、氷河学を考慮に入れた――自然と化したチューリヒ工科総合大学なのであり、ひるがえって州教員ポストは工業専門分野へ展開を遂げた山塊であった。そしてゲシェネンの地と同じく、支配しているのはここでも、永遠なる精神の薄明であった。(5/13)

この奇妙な虚構によって示唆されているのが、一九三〇年代後半以降、スイスの文化的イデオロギーの中核を成してきた「精神的国土防衛」であることは明らかだろう。[4] 軍事的国土防衛、経済的国土防衛とともに精神的国土防衛が、スイスの国土防衛の三つの柱を成していた戦前の状況と、戦後スイスにおける公式人文科学の制度が連続性を持っているとの認識を前提に、ブルガーは作品冒頭でこうした虚構を設定しているのである。そして、このアカデミズムの組織から放逐された、「ドイツ文学および氷河学」を専門分野とする主人公ヴォルフラム・シェルコプフには、このスイスならではの精神性の固陋さを批評解体するという課題が課されることとなる。とはいえ、その射程がいわば「想像の共同体」の解体にと

どまるのであれば、この作品は長編小説の形態をとる必要はなかっただろう。実際、執筆中のブルガーから、このある意味、直截的なタイトルを聞いた友人の思想家E・M・シオランは「タイトルがよくない」と即座に断じたという。[5] しかしながら、ブルガーの長編小説の過激さは、アカデミズム批判、ナショナル・イデオロギー批判の舌鋒の鋭さにあるのではない。先述した構想メモでも確認したように、ナショナルな神話の解体は、あくまでもこの小説を織りなす糸の一つなのであって、さらに困難な課題の呼び水なのである。州教員ポストから放逐されることで、主人公シェルコプフは自分自身の〈母をめぐる病〉と向かい合うべく、みずからの下意識に潜入するようにアルプス山岳地下坑内の病院における「人為の母」と呼ばれる未知の治療法に向かうのである。[6] ――ちょうどアカデミズムでのポストが拒まれたブルガーが、作家として長編小説執筆に向かったように。

三　造語の氾濫、あるいは、「治療としての執筆」？

ブルガーは主人公の定義し難い病を形容すべく、さまざまな造語を作中にちりばめている。まさに名づけ難いがゆえに、「シェルコプフ病（Morbus Schöllkopf）」（5/191）と名づけられもする病を病んだ主人公は、「全身患者（Ominipatient）」（5/39）、「ペニス患者（Penispatient）」（5/67）、「心身患（Psychosomatopath）」（5/72）、「インファウストゥス博士（Doktor Infaustus）」（5/225）――むろんトーマス・マンの『ファウスト博士』のパロディーである――などと呼ばれ、その症状も「いちもつ痛（Gliedschmerzen）」（5/31）、「いちもつぎっくり（Hexenschuß im Glied）」（5/144）、「痙性結合性器（spastisch verknoteten Gehänge）」（5/180）、「腰部麻痺（Lumbuslähmungen）」（5/197f.）等々と形容され、その病歴は「母既往症（Mamamnese）」（5/24）、さらにこうした造語自体が、「病理学的外国語（Fremdsprache der Pathologie）」（5/212）と、また造語を要する存在が「外国語に汚染された怪物奇形児（Fremdwortverseuchte Freak-Abnormitäten）」（5/211）と叙述されているのである。

ブルガーはいわば確信犯的に、病の不可知性を言語表象の限界として提示している。逆向きに言うなら、流通言語を素材に新たな造語をつくることは、ブルガーにお

いては言語の拡大であり、認識可能性の拡大なのである。既存の言語からの逸脱を厭わぬ、言語との創造的な関わり方をブルガーは、前作長編小説『シルテン――審査官会議宛の学校視察報告（Schilten. Schulbericht zuhanden der Inspektorenkonferenz）』（一九七六）において「言語-教育／言語-引き伸ばし（Sprach-Erziehung）」（4/228）と呼んでいる。[7]

このように既存の単語を素材に作り出された造語の中には、小説外のテクストと読み合わせることで、伝記的な文脈における由来を推測するできるものがある。その一つが、作中、もっとも頻繁に言及される症状、「下半身偏痛（Unterleibsmigräne）」である。

> 自分が心の中でこう考えているのが聞こえてくる、まるで昨日のことのように、自分は穴を穿たれた腹では彼女［引用者注―母親のこと］を助けることができない――彼女が差し出したのは偏頭痛（Migräne）、私が差し出したのは切開された下半身（Unterleib）。（5/144）
>
> わたしにはわかっていた、鬱また鬱の中央山塊に凝固してしまった自分には、予言者を呼びよせることに成功してはじめて可能性がひらかれうることが。わたしが虚構したキーワードは［……］下半身偏痛だった、「女性病」と言えようものだが、実際それは「女性をめぐる病」なのかもしれなかった。予言者を、それがたとえ怪しげな予言者であれ、誘い寄せ、地滑りのようにそこに向かって押し寄せるのだ――そして彼は連絡をとってきた。
>
> この上なく健康な場合にのみ関わっても問題ないような、アッペンツェル＝インナーローデン準州、トゥルガウ州、グラールス州からの、胡散臭いやぶ医者や磁気療法師からの治療の申し出に混じって、ある日のこと、ゲシェネンのアウアー・アプランアルプとかいう人物から電報が届いた――あなたの虚弱症状には／人為の母が必要／今日来られたし明日はもうだめ。（5/41f.）

この二つの箇所を読んでわかるのは、「偏頭痛（Migräne）」と「下半身（Unterleib）」から構成される造語、「下半身偏痛（Unterleibsmigräne）」が、単に主人公の体の痛みを名指しているのではないことだ。それは、偏頭痛

に苦しむ母を前にしての自分の無能さを、あるいは、自分の無能さを思い知らされた経験の記憶を名指している。この造語には、抱えこんだ名づけ難い病が、自らの身体のみならず、自分と母との関係に由来することが、書きこまれているのである。さらに小説外のテクストを読み合わせることで、未知の治療法「人為の母」を推奨してきた人物の奇妙な名前、「アウアー・アプランアルプ（Auer Aplanalp）」とこの病との関係が見えてくる。

五歳の時、かつて生まれた州病院は、私にもう一度戻ってくるように求めてきた。アウアー先生が鼠径ヘルニアの手術をした。手術の間に麻酔が弱くなった。私は寸時、目を覚まし、しかし痛みは感じることなく、手術が夢なのか、こうして目覚めたのが夢なのか自問した。医師は新しい麻酔布を私の顔に乗せて、私の記憶が正しければ、こう言った――こいつはタフな兵士になるぞ。これが私に下された託宣だった、そして私はすぐにまた眠りこんだことを喜んだ。今日私は、どんなに意を強くしても確言することができないでいる、そもそも自分は麻酔から目覚めたのかどうか、そう、思うに私は目覚めるべき瞬間を逃してしまったのだ。[……]私は今なお白い病院の子供用ベッドに横たわっていて、手術室から出してもらえるのを待ち続けている。（「簡潔にまとめた私の人生」2/71f.）

ほんの二ページほどの長さしかない、「簡潔にまとめた私の人生（Kurzgefasster Lebenslauf）」に書かれていればこそ、これが、いかに人生における重大事と位置づけられているかがわかるだろう。注目すべきは執刀医師の名前である。この「アウアー先生（Doktor Auer）」の名が、長編小説『人為の母』においては、捻れつつ二重化された「アルプス（Alpen）」とともに――その単数形 Alp は「牧草地」のみならず「悪夢」も意味する――いかがわしい坑内療法「人為の母」を提案してきた電報の送り主「アウアー・アプランアルプ（Auer Aplanalp）」の名を構成する。この人物が考案した療法に向かうことは、名状し難い病の由来に遡行することを意味しているかのようなのである。

医者の一言、「こいつはタフな兵士になるぞ」から、小説冒頭に置かれたあの「精神的国土防衛」を想起させる軍事と人文科学が結びついた大学組織＝アルプス地下

に穿たれたレデュイ要塞、という虚構を想起することは決して的外れではないだろう。母をめぐる病と母国スイスをめぐるナショナルな言説が交差する場所、そこに主人公、そして自らの病の起源と治癒可能性をブルガーは設定しているのである。

四　「母への手紙」、あるいは、あらためての帝王切開宣言

怪しげな坑内治療に入っていく第四章の前に、主人公シェルコプフが「母への手紙」を書きおくる第三章がおかれている。ただし、その手紙は母本人にではなく、母の愛を独り占めにした妹にむけて書かれている。

> 尊敬する、しかしあらかじめすぐさま言っておくなら、忌々しい三親等の、四親等の、何親等だろうがどうでもよい妹よ！　あなたの母に、その人がなお生きているとしての話だが――というのも周知のように私のことなど一度たりと気にかけず、あなたとの共棲生活に耽りつづけた人のことを私は親しく知りようもないのだから――どうか以下の、さしあたってはおそらく遺言の意味をも持とう不快なる原稿（Meleskript）をお伝え願いたい。私の状況はといえば、ゲシェネンの冷泉のもとでどうにも行き詰まってはいるものの、しかし「母は常に確実なり（Mater semper certa est）」とのローマ法の基本条文から解放される希望はいまだ完全に捨ててはいない。義理の息子とは、なおざりにされるものなのだ、というのも古高ドイツ語で»stiof-«、»stiuf-«とは先っぽを切られた、奪われた、孤児になったという意味であり、»bi-stufan«とは、子どもたちもしくは両親を奪われることなのだ、切り株（Stubben）だの木の株（Baumstümpfe）だのといった語を参照すればわかるだろう。法的にはこれは、母であること、つまりは私、ヴォルフラム・シェルコプフを産んだという権利は――こちらもまた忌みはばかられぬ限りは――坑内治療において、異議申し立てにさらされることを意味しよう。（5/141）

すなわち、「人為の母」と呼ばれる坑内療法は、ヨーロッパ文化の基盤にあるもっとも古い法においてすら疑いなきものとされてきた、「母であること（Mutterschaft）」

を無きものとするための療法である、ということだ。

そして、ゲシェネンでの第二章の終わりには、主人公が有名な悪魔石の上に立ち、母への呪詛を朗誦する場面があるが、作中、「古高ドイツ語」とされているこれもまた、実は作者ブルガーによる虚構言語であり、彼自身の言葉を信じるならば、古高ドイツ語をスイス方言風にアレンジしたものである（8/137 参照）。とはいえ、同定することが重要なのではない。それは第二章末尾での初出時においては、誰にも明確に理解できなければこそ呪詛になりえている[8]。のちに、小説作法上、第三章において再掲された際に、三行目以降が現代ドイツ語に翻訳されることではじめて、意味のレベルでアクセス可能となるのである[9]。こちらを日本語訳に原文を添える形で引用し、この呪詛の内容を確かめておこう。

それゆえ、血を分けぬ同祖の妹よ、我ら、ゴットハルトと私は、この生誕は無効であると高らかに言おう、公の無効宣言によりこれを封印しよう、不可逆性から摘出しよう。我らは今ひとたび、このたびは喜悦とともに、世界へ生まれ落ちよう。我らは山を動かし、あらゆる悪魔石を道から除こう、もはや二度と花崗岩のゴルゴダから下界へ、呪詛を吐かずともすむように。

汝ら、恐怖の母たちよ、
孤独の中にあって高貴なる、女神たちよ、
汝、慈母ヘルベチアよ
石でできた丸屋根の胸をもつ、
呪しき吸血者よ、白き同業者仲間よ、
汝ら平地の化物よ、癒しがたく健全な者たちよ。
我はここに、この
ゲシェネンの悪魔石の上に立ち
岩壁から呪おう
三悪魔の名においてあらゆる印をおまえらに、
病弱な捨て子たる私は、
ゴットハルト北壁上に投げ上られた
黒い蜘蛛——
花崗岩に噛みつき、地の底へ向かおう、
けれども地獄へ向かう前に、
汝ら、外界に残されし者たちよ、
シェルコプフに巨人の力が与えられてあれ、
今ひとたび、ウンシュプネンの石を
山上へ押し上げ、悪魔谷へ転がし、
万の重みで汝らを押し潰す、
地形すら変えようシェレネンの地滑り、
汝ら全員に土に塗れた茶色い死をもたらして。
我がここで寒さと氷でくたばる前に、
冷たいソフィーがわが血を凍りつかせる前に、

汝らは割れ目と深淵へ沈むがよい、
我が殺人者の溝の、
この死ぬほど侮辱された心の、始源の峡谷で。
産婆らよ、外科医らよ、骨をも砕く乱暴者らよ、
汝ら、天使たち娼婦たちよ、妖精たち魔女たちよ、
もっともながら恐れよ、我が報いられることを、
そして降りてゆくがよい。

O filu firinlihho muoter,
o gutinna giwaltigun in wuostinnom:
Ihr Schreckensmütter,
Göttinen, hehr in Einsamkeit,
Du Alma Mater Helvetiae
Mit der Kuppelbrust aus Stein,
Gottverdammte Schröpfer, der weißen Zunft,
Ihr Flachlandungeheuer, unheilbar gesund:
Hier steh ich auf dem
Teufelsstein zu Goschenen
Und fluche von der Felsenfluh
In drei Teufelsnamen alle Zeichen euch,
Ich bresthafter Findling,
Hinaufgeschleudert an die Gotthardnordwand,
Die Schwarze Spinne;
Ich beiße auf Granit und geh zu Grund,
Doch eh ich in die Hölle fahre,
Ihr Hinterbliebenen der Außenwelt,
Mögen Schöllkopf titanische Kräfte gegeben sein,
Noch einmal hochzustemmen den Unspunnenstein,
Hinauf zu wälzen in die Teufelsschlucht
Und mit aller Wucht auf euch zu schmettern,
Ein Schöllenen-Erdrutsch, landschaftsverändernd,
Der euch allen bringt den braunen Tod;
Eh ich krepiere hier in Frost und Eis,
Die Kalte Sophie mir das Blut zufriert,
Sollt ihr versinken in den Spalten und Klüften,
In der Urklamm meiner Mördergrube,
Dieses zutode beleidigten Herzens:
Wehmütter, Bader, Knochenbrecher,
Ihr Engel und Huren, Feen und Hexen,
Fürchtet zu recht, daß mein Recht mir geschehe,
Und fährt hinab.

ことによると、血を分けぬ妹よ、わが解放書簡の追伸であなたの母に、私に二つめの、裸の生を、少なくともこの生を貸し与え、帝王切開を引き受けたことに対する感謝の言葉をいくぶんなりと足元に叩きつけることもできるやもしれぬ。(5/161f.)

シェルコプフはここで、健全なる慈母ヘルベチアおよび母からの解放を宣言すべく、神話的言説においてスイス建国時の「捨て子石（Findling）」とされるゲシェネンの「悪魔石」と、母の愛が注がれることのなかった「病

弱な捨て子たる私」（Ich bresthafter Findling）」とを重ね合わせつつ、スイスならではのカタストロフを要請する。すなわち、建国神話と同じ一三世紀に、悪魔によってかけられたとされる「悪魔橋（Teufelsbrücke）」がかかる「シェレネン（Schöllenen）」の谷に「地滑り」を起こし、建国以来の地形そのものを変容させようというのである。そうすることではじめて、「シェルコプフ（Schöllkopf）」の「生誕を無効とし」、それを「不可逆性」から摘出することができるかのように。[19] 言うまでもないことだが、悪魔石そのものの落下を前提とするこのカタストロフはむろん、シェルコプフ自身の崩壊、落下抜きには実現されえないだろう。

五　坑内療法「人為の母」、あるいは、スイスの核に内在する他者性

第二次世界大戦時のスイスで構想されたアルプスを砦とする「レドュイ要塞計画」において、ゴットハルト峠は当然ながら、北と南からスイスを挟みこむ枢軸国側の交通を遮断する要衝の一つとみなされていた。この、合理的なようにも倒錯しているようにも感じられる祖国防衛計画は、作中で以下のように揶揄されている。「レデュイ計画のおかしな点はなんといっても、アンリ・ギザン将軍が本気で［……］、平地は戦わずして敵に明け渡し、軍はゴットハルト装甲室に確保することで、つまるところスイスの一番お気に入りの高価きわまりない玩具を救おうとしたことだった。［……］アルプス連山にあふれんばかりの兵士ばかりが残りかねなかったわけで、そうなれば我々はナチスドイツが降伏したあかつきには、軍出身の連邦議員をトップにいただく山岳プロイセンになっていた可能性もあったのである」。（5/133）しかしながら、まさにこのかつての祖国防衛計画の心臓部で、治療法「人為の母」を施す坑内病院を探索しようとしたシェルコプフは、予想だにしなかった経験に遭遇する。「ケーペニックの大尉」よろしくスイス軍の制服を着こむことで、スイス軍専用の入口より坑内に侵入することに成功した彼――この時点での異名にしたがうならギー・チュオール――は、このもっともスイス的ともいえよう場所で、こともあろうにオーストリア警察に拘束されてしまうのである。

しかしながら「税関です」とのなつかしげな挨拶で

迎えたのは、国土防衛軍所属の同僚兵士ではなくオーストリアの国境関税検査官で、彼は二重帝国的な丁重さでもって、失礼ながらあなたはさしあたり、たしかに武器は所持していないものの――それは罪状を軽くする状況ではありますが――スイス軍服着用状態でオーストリアの連邦領域に立ち入ったかどで、失礼ながら少しばかりのあいだ、拘束されることになりますと言ってきたのである。(5/137)

自分がスイス軍兵士チュオールならぬ、患者シェルコプフで、アウアー・アプランアルプの坑内病院へ向かおうとしていると明かすことで、この逮捕劇はことなきをえることになるのだが、スイスがその核に、浅からぬ歴史をもつオーストリアの飛び地を抱えこんでいたという、まさに「人為の母」にふさわしい痛快きわまりない虚構は、おそらくは、ブルガーがスイスには存在しない「坑内療法（Stollentherapie）」というものを、オーストリアにおいてはじめて体験することができたという事情に由来している。ブルガー自身が、この長編小説の執筆でもっとも苦労した点は坑内療法としての「人為の母」の細部の叙述であったことを明らかにしているのだが、作品完成前年の一九八一年の八月から九月にかけて、ブルガーはオーストリアのバートガシュタインに実在する坑内療養施設に患者として入所しているのである。[1]

おそらくはそこでの実体験にも基づきつつ、第四章でシェルコプフはベッド付きトロッコとでもいうべき代物に載せられて、天然のサウナに出入りするようなやり方で、熱さと冷たさが交錯する状態に置かれ、半ば譫妄、妄想に陥りつつ、幼年時代の記憶にも遡行していくことになる。その先で、最終的に病院スタッフの口から語られるのは、なんとも唖然とするような文学的な言葉である。

別の言葉で言いましょう――あなたがすでに受けていると思い込んでいる「人為の母」は今から創り出されなくてはならないのです。あなただけが、シェルコプフさん、あなたの一回的な肉体と魂から織りなされる作家複合体だけが、それを虚構することができるのです、しびれるような痙攣によって叙述することができるのです、そういうわけであなた自身もまた、あなたの寸法に合わせて作られた治療法といえましょう「人為の母」の発見者なのです。教室

医学、疑似医学のことごとくがあなたの独創性、あなたの症候群を前にして言葉を失い、兜を脱いでいます。唯一の問題は、あなたを坑内へ引きこむことだったのです。(5/200)

坑内療法とは、この小説そのものだと言っているのに等しい言葉である。加えて、冒頭の連邦工科総合大学をめぐる叙述にも関係してくる、興味深い療法も加わってくる。

彼女は医者で、魂の心理学を山登りと取り違えてはいけないことを心得ていた、魂は一つの器官であって、身体同様、再生するには時を要するということを。そういうわけで彼女は私を氷河試験に送りこんだのだった。私の分裂、罅割れといった気候条件にさらされつつ堆積した氷河の層が、あたかも年輪のように読みとれた、蝕まれていった領域、培われていった領域。漂礫、玉石をのせつつ突出している先広氷舌が確認できた。この――名無し――が何を企んでいるのか、今にも崩落しようとしているのか、さらに伸びていこうとしているのかはわからなかった。岩棚上方の巨大な氷塊、セラッコ・ソプラ・ウナ・フォッラ・ロチョーサ、アイスフォール・オーヴァー・ア・ロック・レッジ、セラック・オデシュ・ダン・グラダン――あらゆる言語で怪物はわたしに語りかけてきた。(5/212f.)

ドイツ文学と並んで氷河学の専門家としてアルプスの氷河を知悉しているはずのシェルコプフは、治療の一環として見せられた氷河が未知のものであることに愕然とする。この「私の分裂、罅割れといった気候条件」にさらされつつ年輪の如きものが刻みこまれていった、今にも崩落しそうでしなさそうな氷河には、「名無し(Name-less)」という名が与えられている。そしてそれは、氷河学ならではの用語「先広氷舌(Tatzenzunge)」でもって、(ロマンシュ語こそないものの)多言語国家スイスの三つの言語に英語を加えた四言語でシェルコプフに話しかけてくる。ここで否応なくふたたび想起されるのが、あの悪魔石の上から吐かれた呪詛の中の「地形すら変えよう、シェレネンの地滑り(Ein Schöllenen-Erdrutsch, landschaftsverändernd)」である。

この「名無し」に名を与えるということ、これこそが

おそらくは、この「氷河試験」においてシェルコプフに求められていることなのだが、実のところ彼は、この氷河そのものの崩落というカタストロフを賭け金に、自然すなわち自明となっている「地形、風景（Landschaft）」に変容をもたらさんとしているように思われる。「カタストロフ」とは、予測・計算可能なものとして捉えられる「リスク」の彼方にある別種の大惨事を指す概念なのであって、これを援用しつつ言うならば、ヘルマン・ブルガーはいつなりと起こりうる自分固有のカタストロフをスイス固有のカタストロフ（＝地滑りもしくは氷河の崩落）と重ねることによって――無謀にも、というべきだろうか――過去の神話にとどまらず、「連邦工科総合大学」のように現実的・具体的な諸制度ともなっているスイス的神話に挑んでいるのである。

そして最終章「ルガーノに死す」に向かう前に、ブルガーはいま一度、第二次世界大戦のレデュイ要塞作戦的なメンタリティーに一撃を加える。

結論に至るとしましょう、友人の皆さん――聖ゴタルドをかつてより覆っていた秘密の言葉は、終着駅ではなく通過駅なのです［……］。この王の山脈に踏み入った者たちはみな、ミラノ大公然り、ヒルデスハイム司教然り、目隠しをしてシェレネンを抜けさせた年老いたローマ巡礼者然り、悪魔の助けを借りてロイス川を越える橋作りに成功したウーリ人たち然り、クレティとプレティ然り、アレクサンダー・スワロフ総司令官然り、原初三州出身の傭兵然り、ルイ・ファーブルと国道建設を担当するスイス内務省然り、彼らはみな、ただ一つの目的を持っていました、ゴットハルトを通過する、貫通する、後にするということです。「わたしは通過する」――「通過すること」――「通過した」――「通過し終えた」、湯治集会の皆さま、向こう側へ行くこと、通り抜けること、そしてまた何かに変容すること。留まるのではなく、しがみつくのではなく、腰を据えるのではなく。全世界のなかでゴットハルトを最終避難所に濫用した唯一の制度、それがスイス軍なのです。そういうわけで、私は宣言しましょう、「通過理想主義者」こそ快癒した者であり、「山岳プロイセン」は病んだ遺産なのです。（5/239）

かくしてシェルコプフは、この治療法「人為の母」をも

通過することを宣言する。「いまやあなたたちも理解すべきでしょう、病を呼び起こすヴァサーファレンたち、アウアー・アプランアルプたちを失脚させ、自分自身の、個人擬似医学を王座にすえる限りにおいて、誰もにこのチャンスが与えられているということを。ただし、そうする限りにおいてです！　わたしの道は、母たちへの歩みであり、あなたたちのそれは別の地下牢へ、別の灯台へ通じています。決して忘れてはなりません、穴から出ることを、生へ戻ることを、坑内療養会社の代用教師たち、精神技術工学者たちのもとから立ち去ることを。」（5/253）行き先はむろん、上述された歴史上のあらゆる通過主義者たちと同じく、アルプスの南へ、イタリア語圏へ、強い陽光が生み出す色彩の中へ、である。

六　「ルガーノに死す」、あるいは、言葉の魔術

主人公が快癒して生へ帰還したのか、それとも生そのものから離脱してしまっているのかが判然としない、多幸感に満ちすぎている文章が書き連ねられているのが、最終章「ルガーノに死す」である。坑内を出て、アルファロメオに乗って猛スピードで、アルプスの南、イタリア語圏のルガーノに向かったシェルコプフはもはやシェルコプフではなく、アルマンドという名に、さらには「アルマンドたち（Gli Armando）」として複数の存在となり、その言語も如実にイタリア語が浸透したものへと変わる。「一つの生涯で一つの言語を学ぶのでは不十分、生を楽しむにはもう一つ別の辞書を用意しなければならぬ――愛せ、アルマンドよ、恋に落ちた、第一の恋人よ。（Eine Sprache fürs Leben zu lernen genügt nicht, man muss sich ein separates vocabolario anlegen für Lebensgenüsse: far l'amore, innamorato, Armando il primo amoroso.）」（5/261）そして叙述される世界もかくも色彩豊かなものに変わる。

> オパックホワイト、クロームイエロー、ナポリイエロー、カドミウムイエロー、インドイエロー、金黄土、焦げた赤褐色［……］。八月の太陽がそんなものに配慮しようか。それはコリーナ・ドーロの上ですべてをなぎたおす。我らアルマンドは、当然ながら、スクリーンもパレットも持ってはおらぬ。そんなことにはかまわず、我らはあらゆる色調を消尽

する、マジェンタシャドーもインディゴブラックも、色漆喰砲を聖母被昇天祭日の空へ噴射する［……］。水彩画をなお描く者は、痴れ者にすぎぬ。（5/259f.）

豊穣な色彩に彩られた現実世界への帰還と言祝ぐには、不気味にすぎる、不吉にすぎる文章である。あまりに過剰な多幸感が不気味なだけではない。言語の用法が不吉なのである。このように色彩名を具体的事物と結びつけて羅列していく先では、当然ながら、世界は抽象化不能となる。言語は「すりきれたメタファー」（ニーチェ）であってこそ、思考と表現の素材として機能しうるのであり、[12]さもなくば人は、ボルヘスが「記憶の人、フネス」で描いたようなゴミ溜めのような記憶に押しつぶされ、太古から生きてきたかのような相貌とともに、若くして老いてしまうほかなくなってしまう。[13]その意味で上述のテクストは、色鮮やかな世界を肯定しているようでいて、実のところは、世界を言葉で描くことを心の底では断念してしまっている、絶望的叙述であるかのように思われる。そうであればこそ、このような危険きわまりない言い切りも可能となるのである。

紺碧、碧青、群青、海そして母。いったいどれくらいかかっただろう、私たちが単純な真実が分かるようになるまでに――大地を抱きしめるという。私たちがあの難解な学問を学んでしまうまでに――ただ存在するという。（5/267）

この最終章において、ブルガーはそれまで造語の限りを尽くして、拡張し続けてきた言語表象との格闘を超越してしまったかのような発言を繰り返す。そしてそれは、この世の重力のもとにあっては、鈍重な限定された身体で一つの場所を占める以外のことができぬという、存在の前提条件すら乗り越えたかのようである。

そもそものところが神経過敏ではないか、赤に賭けるか黒に賭けるか、偶数に賭けるか奇数に賭けるかなど。そんな問いなど、生のそして死の芸人たるアルマンドたちの知ったことではない。（5/266）

この文章が意味しているというより、行為遂行（パフォーム）しているのは、ちょうど言葉によって、「大地を抱きしめる」とも「ただ存在する」とも言えてしまうのと、あたかも世

界の中にあって人間が「水の中の油」の如き存在ではないかのように言えてしまうのと同じであって、言葉にはあらゆる限定――言葉による限定、身体による限定――も超越した〈かのような〉表象が可能であるということにすぎない。それこそが、明示的には「死んでいる」とはまったくもって書かれていないにもかかわらず、この章が「ルガーノに死す」と題されている所以である。ここで名を変え複数化した主人公は、死んではいないけれど「死の芸人」なのである。

ブルガーはこの長編小説を締めくくるに際して、小国でありながらともすれば肥大した自意識をもとうとする、スイスの一側面をカリカチュアすることも忘れてはいない。

興味深いのは、ルガーノを訪れたたいていの観光客が、ミニチュア版スイスにたどりつく前に、モンテ・ブレにするか、サン・サルヴァトーレにするかの問題で挫折することだ。［……］二十五分の一に縮小されたスイス――なんという憩いの地！　たとえば、十六番と十七番のオブジェの間の、スイス「国立」クニー・サーカスとシュヴィーツのスイス・アーカイブの間の一隅など、どうだろう。［……］この選択につぐ選択の人間の生には、笑い死にがお似合いではなかろうか。ブレにするか、サルヴァトーレにするか？　どちらも真っ赤なケーブルカーで行くことができる。どちらも。（5/276）

結

ヘルマン・ブルガーは、一九八八年に『論理自殺論考――自死について（TRACTATUS LOGICO-SUICIDALIS: Über die Selbsttötung）』（言うまでもなく、ヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』をふまえたタイトルである）を上梓したのちのインタビューでは、この自殺をめぐる書物を書いた今では、自分自身はなおも生き延びることができるのだと答えている。しかし、翌一九八九年二月二八日、彼は現実に自死を遂げる。興味深いことに、その少し前にブルガーは写真家のイヴォンヌ・ベーラーとの仕事で連続写真を撮らせていて、それは三月八日、ブルガーの骨壷埋葬の日の新聞に「みずからを魔術で消し去る」と題して、ブリュッケンバウアー紙に掲載された（図2）。

これを最終章「ルガーノに死す」における、〈かのような〉の書法の写真版のパフォーマンスということもできるかもしれない。

誰よりも彼を賞賛し支援し、個人的にも親交のあった批評家マルセル＝ライヒ・ラニツキは、死亡直後に発表された「心筋梗塞」という知らせをまったく信じようとせず、「人間は他の誰のものでもなく自分自身のものである、いつなりと自分自身に宣告を下す権利を持っているのである」という『論理自殺論考』の言葉はすでに人びとの知るところであると記し、ブルガーみずからが選んだものとして、その死を悼んでいる。[14]

最後に言い添えておくならば、小説執筆はブルガーにとって、やはりセラピーではなかった。

もう一度繰り返してよろしいでしょうか、わたしにとって書くことはいつも、ただならぬ非常事態のさなかにあって、わが命を救うための――というか、今しばし、ながらえるための――

Nummer 10 8. März 1989 Brückenbauer Zeitspiegel 19

Wenige Tage vor dem Tod entstand dieser Hermann-Burger-Fotoroman:

Sich selbst wegzaubern

Am letzten Februartag ist der Schweizer Schriftsteller Hermann Burger «plötzlich» gestorben. Aber mit der plötzlichen Veränderung – dem Zaubern – und mit dem Sterben hatte der Autor von «Schillers», «Diabolis», «Der Mann aus Wörters», «Die künstliche Mutter», «Tractatus logico suicidalis», «Der Schuss auf die Kanzel», «Der Autor auf der Stör» (alle im Fischer Verlag), «Brenner» (Sieberkamp) schon seit je...

Als Hermann Burger darum vor wenigen Tagen unserer Fotografin Yvonne Böhler für die neue «Brückenbauer»-Serie «Künstler-Fotoroman» Modell stand, wunderte sich niemand über das von ihm mit Begeisterung und sichtlicher Spielfreude aufgegriffene Thema: «Der Zauberer Burger zaubert sich selbst Stück für Stück im Nichts.» Ein typisches Burger-Thema, zu dem er noch selbst die Sprechblasen titeln wollte.

Die obige Bildfolge hat ihm gefallen, wir veröffentlichen sie zusammen mit unserem Dank dafür, dass er wie kein anderer den Ernst und die Lächerlichkeit sacht gemischt, sondern dingfest, wortfest gemacht hat. Als «bösen Traum» wollte Burger diese Selbstwegzauberung deuten – dösend, erwachend zeigt ihn das letzte Bild, rechts. Zum Erwachen ist es nicht mehr gekommen.

H.R.P.

Bilder Yvonne Böhler

図2（8/363）

長期的対抗措置であったし、そうであり続けているのです。(8/128)

あるいはまたインゲボルク・バッハマンの言葉を引きつつ、ブルガーはこう語る。

苦痛を否定すること、それは作家に課された仕事ではありません。[……] 逆に作家は、それを感知し、そしてもう一度、私たちが見ることができるように、現実のものとしなければならないのです。だって、私たちはみな、見えるようになりたいのですから。(8/58f.)

ブルガーにとっての小説の執筆は、みずからを治療するための手段ではなく、なおしばし生き延び、そこで書きつけた言葉とテクストによって、世界における可視の領域をいくぶんなりとも拡大しようとする試みだった、と言えばよいだろうか。

本論文は、科研費 19H01251 の支援を受けて作成した。
(This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number 19H01251)

《注》

本論文においてヘルマン・ブルガーのテクストは、Hermann Burger: *Werke in Acht Bänden*. München 2014. から引用し、(＊/＊) の形で巻数と頁数を示す。

(1) Peter von Matt: *Das Kalb vor der Gotthardpost. Zur Literatur und Politik der Schweiz*. Ulm 2012, S. 62–67.

(2) 例えば、*Gotthardphantasien. Eine Blütenlese aus Wissenschaft und Literatur*. Hg. von Boris Previšic. Zürich 2016. に所収された諸論考、作品を参照されたい。

(3) このスイスとアルプスをめぐる神話的言説の歴史的形成プロセスについては、以下の拙論を参照されたい。新本史斉「〈故郷としてのアルプス〉を掘り崩すⅠ――ヘルマン・ブルガーの『人為の母』序論」(『津田塾大学紀要』第五四号、二〇二二年、一九五―二一四頁)。

(4) 精神的国土防衛のイデオロギーと戦後スイスの文化政策の関係については、葉柳和則編『ナチスと闘った劇場 精神的国土防衛とチューリヒ劇場の「伝説」』春風社、二〇二一年、三七―四五頁を参照されたい。

(5) ただし、ブルガーが自分はもう二年間この作品に取り組んでいるが、このタイトルが何を意味しうるのか、いまだに分からないでいると続けたところ、シオランは「良いタイトルだ」と前言を撤回したという。Hermann

Burger: *Werke* 8/127 を参照されたい。

（6） チューリヒ大学で一九七三年にパウル・ツェラン論で博士論文を、一九七四年に現代スイス文学論で教授資格論文を提出したブルガーは、同年、チューリヒ連邦工科大学（ＥＴＨ）の文学教授カール・シュミートが急死した後に、後継者として採用される可能性があったが、最終的に後任は言語学分野での人事となり、ブルガーの人生はドイツ文学研究から文学作品の執筆へ大きく舵を切ることになる。これについては、Christian Schön: *Hermann Burger. Schreiben als Therapie. Eine Studie zu Leben und Werk*. Stuttgart 1997, S. 19f. を参照されたい。

（7） こうした造語は、ドイツ語の特性上、言及した事例のように、複合名詞の形をとることが多いが、ドイツ文学研究者クリスティアン・シェーンは、マックス・フリッシュ、フリードリヒ・デュレンマット、トーマス・マンの長編小説と比べても（三二―三五％）、またブルガー自身の他の作品と比べても（大多数において三〇―三六％）、この作品において作中全単語のうちで名詞形の占める割合が突出して高いこと（四五・七％）を指摘している。Christian Schön: ibid. S. 154.

（8） この虚構言語の位置づけがたさを示す、一つの興味深いエピソードを紹介したい。まさにスイスの原初三州の一つ、シュヴィーツ州出身の宗教哲学者トーマス・インモース氏はかつて筆者がこの長編小説について口頭発表を行なった際に、この虚構言語のくだりについて、明らかに古高ドイツ語ではなく、さらに古いゴート語の一種ではないかとのコメントを加えた。

（9） ただし、後者は前者の忠実な翻訳ではなく、相当に意訳されていることがうかがわれる。

（10） 興味深いのはこの解放宣言において「帝王切開（Kaiserschnitt）」という語が用いられていることである。これは意味上、自然分娩に対置されて用いられることで、自然な生を拒否するマクベス的形象を呼び出すにとどまらず、それ自体が誤訳可能性を含んだもの――一六世紀に確認されるようになった両義的由来が推測されるラテン語の造語 sectio caesarea（切り取り切開／カエサルの切開）をドイツ語へ翻訳したもの――として知られている。切り取られた捨て子たるシェルコプフが主張するにまさに相応しい語と言えるだろう。

（11） ハインツ＝ペーター・プロイサーは、この滞在経験をもとに書かれたブルガーの短編『バートガシュタインの滝の闇（*Wasserfallfinsternis in Badgastein*）』で「滝が自殺を遂げた」、すなわち、「自然がみずからに手をかけた」と書かれている箇所をとりあげ、人間が自然の搾取を続けた結果、温泉の治癒成分であったはずの「ラドン（Radon）」から「放射能（Radioaktivität）」が取り出され、「温泉地」は開発により「汚染地」に変じてしまったことが示唆されていると論じている。ブルガーにおける母的なものの「自然／人為」の両義性をめぐる議論が、つねに近代史、ナショナリズム史と交錯することを示す一例として触れておきたい。Heinz-Peter

Preußer: Der ›Gang zu den Müttern‹ : Hermann Burgers mythische Phänomenologie des Weiblichen. In: *Hermann Burger — Zur zwanzigsten Wiederkehr seines Todestages*. Hg. von Magnus Wieland, Simon Zumsteg, Zürich 2010, S. 140.

（12） Friedrich Nietzsche, *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*. Hg. von Giorgio Coli und Mazzio Montinari, Bd.3, Berlin 1986, S. 313.

（13） ホルヘ・ルイス・ボルヘス『伝奇集』鼓直訳、岩波文庫、一九九三年、一六〇頁。

（14） Markus Bundi, Klaus Isele (Hg.): *Salu, Hermann. In memoriam Hermann Burger*. Eggingen 1991, S. 7.